れていることが特徴的であり、その他多様な代替療法とともに選択肢として提案されている場合が多く確認できる。また、イリノイ州のカウンセラー、ニール・ハリスは、セッションにおいて迷宮図像を使用する試みを行っており、心理学分野やセラピーにおける迷宮の利用にも注目すべきと考えられる。

なお、ホスピタル・ラビリンズの殆どが二〇〇〇年代以降のアメリカにおいて設置されているものの、これらに先駆けて九〇年代から、医療やケアの施設において迷宮が利用され始めていた例が数件存在している。ホリスティックな生へのアプローチを目的として、瞑想、祈りのワークショップなどを行っているテキサス州の施設 Saint Mary's Seton Cove Spirituality Center²⁾では、一九九四年に迷宮が設置された。この施設における迷宮解釈は、人類の持つ最古の瞑想と変容のためのツールのうちのひとつであり、永きに渡って祈り、儀礼、イニシエーション、精神的成長のために使用されてきた図像、というものである。ホスピタル・ラビリンズの受容のみならず、近年のスピリチュアリティにおける迷宮の普及においても共通する点であるといえようが、迷宮図像にどのような意味を読み込むかという視点に対して、図像の有する歴史の概要が示されても、象徴的意味について提案者からの明瞭な判断は控えられることが殆どであり、やや漠然とした印象を覚える。だが、逆にその曖昧さが、迷宮を歩く現代の人々の抱える多様な問題のそれぞれを個別に引き受けられる柔軟性を生んでいるとするならば、ケアにおける迷宮図像の可能性や今後の活用事例には今後とも注意を払ってしかるべきではないだろうか。

最後に、二〇一一年三月に発生した東日本大震災への反応として、迷宮を歩き、犠牲者や遺族に祈りを捧げるという趣旨の催しがアメリカ、バハマなどで複数行われたことを付記しておく。世界規模の自然災害等の発生時におけるこのような迷宮の利用は、グローバル・ヒーリング・レスポンスと名付けられており、二〇〇五年に発生したハリケーン・カトリーナをきっかけとして発生した活動である。スピリチュアルケアの定義に関してこの場で議論を行うことはできないが、被害者の痛みそのものを直接ケアするという形態ではなく、被害者の痛みに寄り添おうとし、痛みに想いを馳せるといったケアの在り方についても示唆を与えてくれる事例であるように思われる。

追憶の匂い

——むかしの香にぞなほにほひける——

吉村 晶子

副題の「むかしの香にぞなほにほひける」は、『土佐日記』で「ある人」が詠んだ一首の下の句にあたる。上の句は「君恋ひて世をふる宿の梅の花」。都へのぼる一行が差しかかった渚の院に咲く梅の花の香から、かつてこの主であった故惟喬親王を思慕しつつ詠まれた歌である。住む人が変わっても、訪れる者が変わってしまったもそこにありつづける景物は、しばしばこのように過ぎ去りし昔日を追想されるものとして歌に詠まれてきた。『古今集』や『百人一首』でも有名な紀貫之の歌

「人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香にほひける」も同趣の歌としてあげられる。

梅の花の香りが格別に愛でられ詠歌の対象となったのは『古今集』以降と考えられるが、散りゆく花と袖にさえ移り留まりうる匂いという対比のなかで、匂いには不変性や追憶の意味が込められていく。八世紀ごろから流行する薫物の代表的な方のひとつに「梅花」があることも、梅の花の匂いから「誰か」の匂いへという連想に繋がっていた理由と考えられるだろう。

『古今集』の梅花の香りを詠じた一連の歌のなかで、「折りつれば袖こそほへ梅の花ありとやここに鶯の鳴く」「色よりも香こそあはれとおもほゆれたか袖ふれしやとの梅ぞも」などと、「袖」と結びつけられた歌が多いことが、何よりの証左である。ましてそれが同じ名を持つ薫物の香りを身に染めた、あの人を思い起こさせるものであるならば――。

毎年同じ季節に同じように花を咲かせ同じ香りを漂わせる梅の花は、無常の世を生きる人びとの営みを超えたものとして憧憬され、慈しまれた。それは、過ぎ去った過去を今ここへと導いてくるメディアでもある。こうした私たちの生きる時間や世界の外部と通じる匂いという感覚は、たとえば宗教的な言説のなかで頻出する匂いのありようとも通底する。

聖人が身体から芳香を放つというのはよくある話だ。

聖徳太子は、かなり早い段階からそうした人物像が造型されたひとりである。身体から漂う太子の香りは、彼の超越性の証であり、聖性を担保するものである。『上宮聖徳太子伝補闕記』以後、『聖徳太子伝暦』などの太子伝には、幼少期から太子は

良い匂いを放ち、さらにはその匂いが周囲の者に移って何か月も消えなかったと書かれている。太子が片岡山で出会った飢人――太子が「彼は真人ひじりである」と看破した人物も芳香を放っていた(『補闕記』『伝暦』など)。死してもその遺体は芳香をもち(『伝暦』、『日本往生極楽記』など)、また太子の臣下であった屋栖野古連の蘇生譚でも、聖徳太子と出会ったあの世は良い香りがし、しかも連じしんの遺体も芳香がしたという(『日本靈異記』)。平安浄土教の興隆とともに多く編纂された往生伝でも、往生の現場に芳香が漂った。漂った匂いは人びとの袖に移り、往生人と浄土願生者との縁を結ぶ。

また『平家物語』諸本に収められた、のちに石山寺の内供となる淳祐をめぐる逸話では、高野山奥院の弘法大師の即身仏に触れた淳祐の手に芳香が移り、彼の写した聖教までも良い香りがしたとえがかれる。こうした聖なる匂いが移るとい語りについては、すでに別稿で、匂いというものの持続性や移りやすさという特性に聖性の拡大・伸張が託されたものであると論じたことがある(拙稿「聖性と移り香――転生する聖徳太子のイメージと匂い」、『文学』一二巻一号、岩波書店、二〇一一年)。匂いは時間や空間を超え、聖人の存在を確信させ、人びとを魅惑する。これと似たことが、昔を偲ぶ梅の香りについても言うことができるだろう。本発表で指摘したのは、特定の人物や宗教をめぐる信仰を外れた、身近な人びとへの愛情や惜念もまた、時空を超える匂いの存在によって想起され増幅されるということである。匂いの追憶のはたらきは、宗教的な言説にとどまらず、多種多様な言説に通じうると考えられる。